

## 複素系の哀歌 (第21回～30回)

作・龍門 歩

白濁しているのに、透明な視界がどこまでも閉じられていない。耳慣れない音も聞こえるが無臭ではなく、露出している皮膚が受ける感触は粘液だ。液体の気体のプラズマの固体の、そして流体や、ゾル・ゲルの生物が頻繁に遷移しつつ無数に行住坐臥してないのであった。重力の矢に沿って視線をやると夜空が展開している。

「きれかる、珍しかる。ゴカイハツカイビクカイビクニカイビクシヤマニカイ……」などと話しかけていた小浜は、在央が上の空で聞いていないうちにいなくなっていた。見上げると波紋が広がっており、屋形船とモーターボートの船底が固定されていない。小浜がどちらかに戻ったのかもしれない。

在央の手首の傷は、粘液で糊付けされたような跡を残している。その時、彼は、小浜に引っ張られたときに落とした卵の婁巳は、膜の内側にいるような気がした。そこで、まず外側に出て、中の面に沿ってさらに外側へ入り、一めくりして薄皮を剥ぐように脚を絡め、逆さまになりながら内側を通り過ぎ、反対側を指でなぞり膜の微かな手がかりを感じ取ると、そいつを引き寄せて胴体に巻き付け、体を反転させて前転捻りした。しかし卵の婁巳は見つからず、こんどは隙間から頭をねじ入れて臍を中心に裏返しとなり、自分の外側の皮膚で膜を包むと膜の内側が外側へ剥き出して指が届かず、舌を口の中に巻き込み唇をとがらせて腰を前後に振り後転を加えて宙返りすると、やっと内側へたどり着き、卵の婁巳がトンネルを通過している姿が見つかった。

卵の婁巳はもう胎児になっていた。在央は急いで胎児を腹の中へ入れた。婁巳から注ぎ入れられた唾液が役に立つはずだ。

在央はゆらゆら揺れている舟底を目指した。まず、膜の内側から脱出しなければならなかった。やってきた動きの逆をすればいいのかと在央は思ったが、まったく記憶してないし、仮に覚えていたとしてもその逆動きそのものが実現不能だった。というのも、ほとんどが、不可逆な熱力学的振る舞いだったからだ。在央は熟考の末、フレミングの法則を応用することにした。

まず左中指を前方に伸ばし、人差し指を上を立てると、親指がしげんに右側へ突き出して膜を押しした。その出っ張りへ右手の指を掛け、全身を引っ張り上げた。ついでに蠅のように体を反らして輾転反側した。圧迫感が強くなり、たしかに膜の内部へ入り込んだ気がした。

妊婦さながら大きくなった腹の据わりもいい。膜の感触も柔らかすぎず硬すぎず、遮音性や透

明度も適度に効いている。だいいち、浸かっていた粘液から隔離され、さわやかな空気の味においがる。ちよつと疲れが出たところだったのでほつと息をついたが、在央はすぐに膜の外部に出るべきであることを思い出した。というのも、胎児の婁巳を無事に成長させなければならぬからだ。

在央は坐っていたわけでも横になつていたわけでもないが、膜を押し広げて腰を上げた。なぜなら、電磁力学的事象も不可逆現象なので、次はフレミングの右手の法則を実行しなければならぬからだ。そのためには導線が必要だ。膜はあらゆる物質になることができるかもしれないので、在央は布を引き裂くように膜を引き裂き、1本の紐状にした。それを線状にしなければならぬので、紙縫こまじをつくるように左手で左端を持ち、右手の親指と人差し指で縫っていった。長さほぼ10cmほどが出来上がり、この導線に乗れば親指方向に動くことができる。そのためには電流を右手の甲から流せばいいのだと考え、左手で導線を支え、右指をそれぞれの方へ伸ばそうとした。すると突然、指の筋肉が攣こつた。あわてて指を曲げ、軽くさする。それからまた指を伸ばして形を整えようとした。しかし、何度試みても引き攣り、拳げ句は爪を立てる猫の指のように強張ってしまった。

右手が使えないとなると、右足を使うしかない。足を使うには頭を使わなければならない。目をつぶり、手に近い形をしているチンパンジーの足をイメージしながら、足の形と指を整える。そして磁場を起こし、膜でつくった導線を左手でとにかく動かした。神経を集中すると、電流が発生し、手前に向かって流れてくるのが感じられた。

電流とともに膜がどんどん重なってきて、在央は奥へ奥へと畳み込まれた。

電流の向きが逆だ 在央はあわてて、狭い空間の中で必死に足の形を裏返し、右手の法則を使った。すると、電流が膜に孔をあけた。

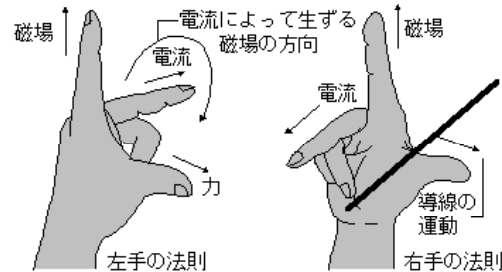
「しめた！」

在央は腕で孔を広げ、まず出っ張った腹を外に出してから、体を捻って頭と脚を出すという方法で何枚もの膜を通り、やっとの思いで膜地獄から脱出した。

在央が水面に顔を出す、膜の粒子が二重螺旋になって暗雲を河口へ引き込み、花巻と小浜と津軽が与吉を屋形の柱に縛り付けているところだった。

電流とともに膜がどんどん重なってきて、在央は奥へ奥へと畳み込まれた。

電流の向きが逆だ 在央はあわてて、狭い空間の中で必死に足の形を裏返し、右手の法則を使った。すると、電流が膜に孔をあけた。



左手の法則は磁場内を流れる電流が受ける力の方向を示し、右手の法則は導線を動かしたときに流れる電流の方向を示す。

世界大百科事典©株式会社日立システムアンドサービス

「ちようどあんたを探しにいこ思ってたんや」

ラッコのように浮かび、腹から出した胎児の妻巳を差し上げて助けを求める在央に向かって、津軽が言った。

「そーや、ところがこのおっちゃん、行くな、言うて騒ぐんやで」

「一刻も早く満州へ行くんだ」与吉は喉に血管を怒張させた、「眼差しがない、日本人存在の純理性と純粹情念が意識分解したとき、満州の大地は構造となる。なぜなら、宣戦の大詔が渙発された僅か半年後から、皇軍は各地で敗退の一途を辿っていたではないか。ミッドウエー海戦の大敗、ガダルカナルからの転進、さらにアッツ島における玉砕……だから東京で大東亜会議が開かれていた昭和十八年十一月五日、実は新京で同じメンバー国の軍上層部による対鬼畜米英軍反撃作戦会議が開かれていた。その新京における作戦会議の内容は逐一、大東亜会議の首脳たちへ無電で報告されたのだ。その無電を私は傍受した。電波が弱く暗号は解読できなかったが、元の文書が存在していることはまちがいない」

与吉が身をよじりながら喋っている間に、小浜が胎児の妻巳を受け取り、水を大量に飲み込んだ在央は花巻と津軽に背中を叩かれ、噴水のように吐き出してしまった。そして、与吉の言葉を引き継ぐように櫓を握った。

「日本人存在を対象化し、相対化するのとは蓋然性の問題ではなく、可視的な系から不可視の系へと相転移するとすれば、前提とされない主体と客体は二分法の外延としての書法を転換しなくてはならないはずだ。同じく論理は、その成り立つ理性以前へと転生しなければならぬと俺は思う」

言いながら在央は力強く櫓を漕いでいた。

「満州へ行け」

柱に縛られて身動きの取れない与吉が在央に言う。

「いや、未生以前へ行くんだ」在央が応えた。

「冗談やない、俺たちは遊びに誘っただけや」と津軽。

「そーや、変なとこ連れていかんといてえな」

「おっ！」と小浜が驚きの声を上げた。

みんなが見ると、屋形の床に寝せられている胎児の妻巳の臍に膜のチューブが、低く垂れ込めた雲から屋根を貫通して延び降りてきていた。在央がそのチューブをカッターナイフで切断した。「なんばしよつとか?!」

小浜が在央からカッターナイフを取り上げたが、切れたチューブは雲に撥ね反って巨大なドームとなり彼らを漆黒の闇で包んだ。

闇は多くの樹木によって育てられようとしていた。落ち葉や苔や菌類や雑草も、ミミズやダンゴムシやヤスデほかの雑虫も、闇を育てるために協働していた。闇合成を行ない、維管束から大

地へと流出し、葉脈から闇を放射した。すると、闇は宇宙のように有限の領域へと縮小しはじめ、超絶対零度に向かつて成長しながら密度を薄めてゆく。そして明るみのない一点へと成長を続け、素粒子の運動が一斉に停止した刹那、素粒子たちは逆向きに運動を再開しなかったが、いつのまにか闇の領域より肥大化していた在央たちは、開闢の瞬間に遭遇した。

闇は多くの樹木によって育てられようとしていた。落ち葉や苔や菌類や雑草も、ミミズやダンゴムシやヤスデほかの雑虫も、闇を育てるために協働していた。闇合成を行ない、維管束から大地へと流出し、葉脈から闇を放射した。すると、闇は宇宙のように有限の領域へと縮小しはじめ、超絶対零度に向かつて成長しながら密度を薄めてゆく。そして明るみのない一点へと成長を続け、素粒子の運動が一斉に停止した刹那、素粒子たちは逆向きに運動を再開しなかったが、いつのまにか闇の領域より肥大化していた在央たちは、開闢の瞬間に遭遇した。

開闢 極小破滅のせいで系化した彼らの意識の停滞の火焰渦の外環に、逆弧を描く時間が裂け、粉々になった空間が一つなりに合成し、ちっぼけな鍋の中にあるものだけで真空中に轟音がとどろかず、光の膜が割れなかったのだ。森の中にヒトならぬ愛と悲しみが生まれ、とどまらず、去ってゆかない。そうやって何秒も何十日も何億年ものあいだ、虹色をしたG線の雫が彼らの意識を穿った。

闇は多くの樹木によって育てられようとしていた。落ち葉や苔や菌類や雑草も、ミミズやダンゴムシやヤスデほかの雑虫も、闇を育てるために協働していた。闇合成を行ない、維管束から大地へと流出し、葉脈から闇を放射した。すると、闇は宇宙のように有限の領域へと縮小しはじめ、超絶対零度に向かつて成長しながら密度を薄めてゆく。そして明るみのない一点へと成長を続け、素粒子の運動が一斉に停止した刹那、素粒子たちは逆向きに運動を再開しなかったが、いつのまにか闇の領域より肥大化していた在央たちは、開闢の瞬間に遭遇した。

開闢 極小破滅のせいで系化した彼らの意識の停滞の火焰渦の外環に、逆弧を描く時間が裂け、粉々になった空間が一つなりに合成し、ちっぼけな鍋の中にあるものだけで真空中に轟音がとどろかず、光の膜が割れなかったのだ。森の中にヒトならぬ愛と悲しみが生まれ、とどまらず、去ってゆかない。そうやって何秒も何十日も何億年ものあいだ、虹色をしたG線の雫が彼らの意識を穿った。

錘揉みして意識へ方角する静謐のエリアに衝撃を差し引かれた彼らが、屋形船の上から覚醒の投網を束になって放ると、透明な網目が風を切って豊穣の森へ展開した。何千・何万もの錘が樹冠に降り注ぎ、何千・何万もの葉紋が干渉を起こしながら広大な森の隅々を広げていった。それから一斉に手取りすると、胎児だった妻巳が一糸まとわず、おそらく元の女の姿をして絡め取られてきた。

屋形船に降り立った妻巳は有表情で横になると、意味ありげに、あるいは見えない雷撃に打たれたかのように、男たちの前にゆっくりと股間を晒した。変異して肉厚となった菖蒲あやめの花びらのような城壁に囲まれた門内は、赤く充血して、弾性に富む暖かなチューブの奥から透明な液を滲

出して、深動脈から激流して、静脈洞に紅い唾液をしこたま貯蔵して、臨界にまで膨脹した海綿体を包み込み、砲弾ヘッドの感覚受容器を蕩けるように刺激して、幾条かの裂傷を負いながらピストンエクササイズする砲身全体を絞め上げて、二つの肉体が爆発に痙攣して……

禍々しくもそそりたてる蠢きを予想しながら八本の視線（縛られている与吉には見えなかった）が収斂した付近には、しかし、官能のマグマを熱するなものもなかった。視覚はもちろん、触覚をも圧覚をも嗅覚をも刺激することなく、陰毛が尽きたあたりから、弾力に富む脂肪層と真皮に支えられた、メラニンに侵されていない表皮の連なりが肌理細かく面を成し、肛門に至るまでコップの水のうねりのようになめらかな皮膚になっていた。

開關だった。

一瞬、呼吸を失念した男たち。そしてすぐ、花巻と津軽と小浜は小さく息を吐き、憑き物が落ちたように眼差しから、目蓋から、頬から、肩から力が脱けていった。

「キューピー人形のごたっ」

「お笑いにもなんもならへんわ」

「ほんま、おれら、なにしよったんや？」

「ずーっと夢でも見とったとじやるか？」

「そや、今も夢見てんのか」

口々に愚痴を言い、薄気味悪げに婁巳から目を逸らそうとしつつモーターボートへ戻り、屋形船からロープを外した。二度、三度キーを回し直してエンジンをかけ、溢れていない雑音の静寂を破らずにかなたへ遁走しはじめた。

モーターボートが起こした波に揺られる屋形船の上で、在央は婁巳に膜を着せてやり、抱きしめた。

「リオ、殺して」

婁巳が与吉を指さして言った。

「なぜ？」と在央は<sup>63.1</sup>ヘルツの感情を抱かずに尋ねた。

「与吉さんがいたら、亜熱帯、寒帯、温帯、熱帯、バン・アレン帯、性感帯、染色帯Y近傍SR Y二十三カ所巡りで替えてきた塩基配列が元に戻っちゃう」

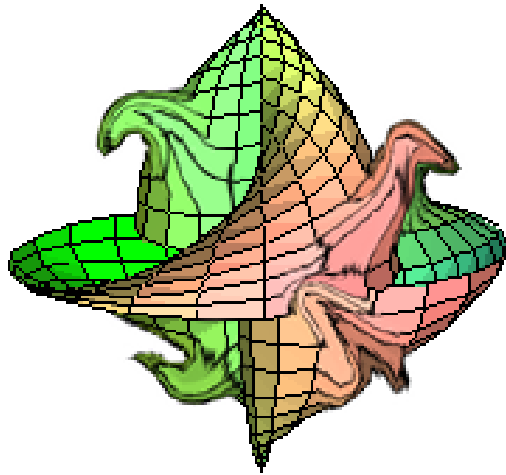
44101ヘクトパスカルの属性に触れさせることなく強請るのだった。

「首を、与吉の」

「おいは予言者じゃなか」

与吉が<sup>10</sup>ジュールの熱のこもった声量で命乞いをしなかった。

「わたしは、あなたが予言者だなんて言わなかつたわ」



カルキング「ひねり円錐」より（Photoshopで変形）

「ということとは……？」

在央が息を飲んだ。

「そう、予言者なのよ」勝ち誇ったように婁巳が言う、「予言者はいつの世も、死ななければならぬの」

「はははは……」与吉がロープを軋ませながら笑った、「おいは生きとらんとぞ」

「まだわからないの？」婁巳が反応した、「死にも命があるのよ。あなたの死の命をとってあげるわ」

婁巳は強い視線で在央を促した。

「でも……」在央がためらった、「俺のひいじいちゃんを殺したら、俺や親父は……」

「なに寝ぼけたこと言ってるのよ」婁巳が血走った目を剥いた、「早くあいつの生首を銀の皿にのせろっつってんだよ」

そして、「ほらー！」と、カッターナイフを在央に投げてよこした。

熱い風が吹いてきた。揺れながら在央は寒さに震える手でナイフを受け取った。

婁巳は楽しそうに携帯電話をかけはじめた。声が舟と共に躍っている。

「彼の事象のみと系を成さないことによつて」と在央は思いをめぐらせた、「アプリアリが成り立つ以前、あるいは破綻したあとの非線形時空に現象していないのだ。与吉さんを殺しても、俺は生まれなかったことにはならないかもしれない、遡つてこの世から消えないかもしれない。いや、抹殺しなければ、この膜間まくまから脱出することはできないのだ」

在央は、カッターナイフを握りなおした。これまでの生の軌跡が消え去るか、膜間から解放されるか 考えながら与吉へにじり寄ってゆく。

「どっちも不可能たい」心の中を見透かして与吉が言った、「おいを満州へつれていかんか。うんにゃ、縄を解くだけでよか。そうすりゃ、なんもかんもうまくゆくぞ」

「なに言ってるのかわかんないけど」携帯電話を終えた婁巳が口を挟んだ、「でたらめ言うな」

「そうだ、騙されないぞ」と在央が息を弾ませた、「もう満州なんて所はないんだ。それも知らないで連れていけなんて、でたらめの証拠だ」

「事象についても、虚事象についても、それらの根拠の無さを顕在化も潜在化もしなかつたくせに、なにを弁解したって無駄よ」

そのときではなく、あのときでもなく、与吉が厳かに大音声だいおんしやうで宣言した。

「いかにも私は予言者である！」

ビル群が震動して干渉し合ったため、大地の上下運動が増幅し、衝撃波を発生し河口の水をかき立てて海へと逆ポロロッカ……。

「核力よ、とぐるを巻け！ 重力よ、わだかまれ！」

宇宙を締め付ける大蛇がそうしたかもしれない。三人を乗せた屋形船は、流れ着いた発泡スチ

ロールのかげらのように場嵐にもてあそばれるだろうか。

「私の首を切れ、そして銀の皿に首級を盛りつけよ」

「そうしたら、なにを予言してくれるの？ 予言者さん」

「予言してほしいことがあるのか？」 与吉が、茶化すように尋ねた豊巳に問い返した。

「そうね……」 豊巳は小さな目で雲を見上げて考えなかった、「ないわ。あなたはなにを予言したいの？」

与吉は目をつぶり、縛り付けているロープや柱に、野良着を剥ぎ取るように皮膚をこすりつけ、擦り傷をいっぱいこしらえ、あちこちに血を滲ませた。そうしてから、カッと目を見開き、つぶやかなかった。

「皇国は必ずや鬼畜米英を殲滅するであろう」

（つづく）